抜丸説話と平頼盛平氏一門離反をめぐって

大羽吉介

一

寿永二年七月二十五日、平氏一門は都を灰燼に帰して西国へ落ちて行った。九条兼実は「玉葉」にその時の模様を

及二巳刻一、武士等奉レ具二主上一、向二淀地方一了者、在レ籠二鎮西一云々、前内大臣已下一人不レ残、六波羅、西八條等舎屋不レ残二一所一、併化二灰燼一了一時之間、煙炎満レ天

と記し、「盛衰之理、満レ眼満レ耳、悲哉、生死有漏之果報、誰人免二此難一、恐而可レ恐、慎而可レ慎者也」と嘆いている。

この一門都落ちに際し、平頼盛の一族のみ都に留まった。この事に関して、覚一本を始めとして語りもの系平家物語諸本は頼盛の離反を次のように記す。

抑池殿のとゞまり給ふ事をいかにといふに、兵衛佐つねは頼盛に情をかけて、「御かたをばま(ッ)たくをろそかにおもひまいらせ候はず。たゞ故池殿のわたらせ給ふとこそ存じ候へ。八幡大菩薩も御照罰候へ」な(ン)ど、度々誓状をも(ッ)て申されける上、平家追討のために討手の使ののぼる度ごとに、「相構て池殿の侍共にむか(ッ)て弓ひくな」な(ッ)ど情をかくれば、「一門の平家は運つき、既に都を落ぬ。今は兵衛佐にたすけられんずるにこそ」とのたまひて、都へかへられけるとぞ聞えし。

（覚一本・巻七・一門都落）

と、頼朝が頼盛に恩義を感じ、それを頼りに一門から離反したとする。さらに覚一本は頼盛が「女院の御めのとご、宰相殿と申女房にあひ具し給へる」ことにより、八条女院の仁和寺の常盤殿に入ったとする。広本系の延慶本・長門本にも同様のことがみえるが、延慶本はこれに加えて、伝家の宝刀抜丸をめぐる一門内部の対立、及び八幡大菩薩の御示現により離反を決意したという説話を載せる。本稿では、この抜丸の相伝をぐるめ説話（以下抜丸説話と称す）が頼盛離反にどのような意義をもち、この説話を通して延慶本編者がどのような視点から頼盛を描こうとしているのかをさぐっていきたい。

二

延慶本第三末・廿六「頼盛道ヨリ返給事」には、語りもの系諸本と同じく一旦は都落ちをした頼盛が鳥羽の南、赤井川原より引き返すことを述べるが、語りもの系諸本と違うところは、その心中が詳細に語られている点である。

行幸ニハヲクレス、敵ハ後ニ有、中空ニナル心地ノスルハイカニ、殿原此度ハナトヤラム物ウキソトヨ、只是ヨリ京エ帰ラムト思フ也、都テ弓矢取身ノ浦山敷モ無ソ、サレハ故入道ニモ随フ様ニテハ随ハサリキ、無ニ左右一池殿ヲ焼ツルコソクヤシケレ、イサヽラハ京ノ方ヘ鎧ヲハ用意ノ為ニ各ノキルヘシ、返々モ人ハ世ニ有ハトテヲコルマシカリケル事カナ、入道ノ末今ハカリニコソアムナレ（長門本も同じ。傍点筆者注）

とその心中を吐露し、語りもの系と同じく八条女院のもとに身を寄せ、頼朝への助命を懇願する。頼盛が八条女院（八条女院暲子内親王）のもとへ身を寄せたことについては、「愚管抄」にも、京都へ戻った頼盛が後白河院に拝謁すべく法住寺殿（「吉記」によれば蓮華王院）に向かい、院より、

サ聞食ツ。日比ヨリサ思食キ。忍テ八条院辺ニ候ヘ。

と指示を受けたことが見え、「玉葉」元暦元年三月七日の条にも

自ニ八條院一有ニ被レ仰事一、頼盛卿申状也

とあることから事実のようである。また頼盛が八条院のもとへ向かったのは「愚管抄」に

モトヨリ八条院ノヲチノ宰相ト云寛雅法印ガ妻ハシウトメナレバ、女院ノ御ウシロミニテ候ケレバ、サテトマリニケリ。

とあり、頼盛の妻が宰相の娘であって、そのことから頼盛が八条院の後見をした関係からであろうか。（注一）

さて、先の延慶本で特に注目されるのは、頼盛が離反を決意するに当たって、「サレハ故入道ニモ随フ様ニテ随ハサリキ」「入道ノ末今ハカリニコソアムナレ」と離反の一因に清盛との不和をうかがわせる点をとらえていることである。延慶本のこの記事については「愚管抄」にも、平氏一門の都落ちを目前にした、寿永二年七月二十四日、源氏軍を討つべく宗盛が頼盛へ山科防禦のための派兵を求めた記事に

頼盛ハ、「治承三年冬ノ比アシザマナル事ドモ聞エシカバ、ナガク弓箭ノミチハステ候ヌル由故入道殿ニ申テキ。遷都ノコロ奏聞シ候キ」

とあり、治承三年十一月の清盛のクーデターを境にして、清盛、頼盛の関係は悪化し、それが平氏一門都落ち時点まで尾を引いていたことと一致する。このクーデターは清盛の反平氏勢力の一掃をねらったものであったが、平氏一門では頼盛が解官され、その所領全てが収公されている。さらに治承三年十一月二十日には、清盛が頼盛を討つという噂さえ広まるほどに険悪な状態になった。（玉葉）またさらに二人の対立は朝庭政治家の間にも周知のことであったらしく、平氏一門都落ちの三日後、すなわち寿永二年七月二十八日には頼盛の処遇を決定するに当たり

就中件卿故入道相国之時、度々雖有不快事今度殊造意不聞、只

為一族許歟、尤可被寛宥（吉記）

とあり、頼盛を処罰しないとの議が大勢を占めた由が見える。

清盛と頼盛との不和については既に安田元久氏(注二)多賀宗隼氏(注三)上横手雅敬氏(注四)等により検討されている。安田氏は治承三年の清盛のクーデターで平氏一門から頼盛のみ解官されていること、さらに十一月二十日には六波羅にいる頼盛を清盛が討とうとしている噂がひろまり、二十二日には頼盛の所領が没収されたことをあげ、「治承三年十一月の清盛のクーデターの時には、頼盛は明らかに清盛の政敵の側に立っていたようである」とされ、さらに頼盛の妻は八条女院暐子内親王の乳母である宰相局という女房であり、その関係により「法皇をめぐる反平氏派の人々と接近しすぎていたのかも知れない」とされた。また多賀氏も安田氏同様、清盛が頼盛を討つという噂をとりあげ、「かかる噂の流れた背後には、清盛、頼盛の対立の尖鋭化を中心とする、ただならぬものがあり、すなわち六波羅政権にとって異分子としての頼盛の存在が強く表面化したものであったことは疑いない」とされ、清盛、頼盛の対立を、宗家との対比に於ける官位上の不満、俊寛の取扱をめぐっての対立、高倉院への清盛の圧力関係に於て頼盛が高倉院に親しみ近づいてゐることの三項目をあげられた。上横手氏も「頼盛がおそらく領家であったとみられる三十三ヵ所の庄園のうち、十七庄は後白河院御領であり、十四庄は八条院領であるのをみても、頼盛が法皇や八条院と深い関係を持っていたことが知られよう。……さらに注目されるのは、宰相局の夫寛雅法印こそ、法皇の信任篤く、鹿ヶ谷の謀議にあずかり、鬼ヶ界島に流された俊寛の父なのである」とし、法皇に近づきすぎたことが対立の一因であるとされた。

清盛と頼盛の対立は治承三年を境として公然化し、それは清盛死後までも尾を引き、頼盛の離反の一因となっていた。この二人の対立を平家物語では広本系諸本、とりわけ延慶本が詳細に記し、さらに対立の一因が伝家宝刀抜丸にかかわるものであり、その相伝が原因で後に述べるように宗盛と頼盛の対立へと発展し、頼盛離反につながったとするのも延慶本である。

三

頼盛が八条女院のもとに身を寄せ頼朝への助命を懇願したのをうけ、延慶本のみ一門離反の因を記す。そこでは

抑々頼盛ノト、マリ給フ志ヲ尋レハ、彼ノ大納言ハ忠盛ノ次男也、太政入道ノ弟ニテオワシマシケレハ、内大臣ノ為ニハ叔父ニテ、世ニモ重クスヘキ人ナリケリ、又落留ルヘキ人ニモオハセサリケレトモ

とあり、頼盛と宗盛の関係をことさら強調する。頼盛を「彼ノ大納言ハ忠盛ノ次男也」とし、宗盛にとっては叔父にあたり、「世ニモ重クスヘキ人」ととらえるのである。それは宗盛の頼盛に対する処遇が良好でなかったことを暗示するものである。頼盛は「尊卑分脈」では忠盛の五男であるが、延慶本編者は忠盛の正妻として一門内部に大きな力を持っていた藤原宗子、後の池禅尼の子の次男と説くのである。池禅尼は忠盛の後妻ではあるが、事実上は正妻としての力を持ち、保元、平治の両乱での活躍はよく知られているところ

である。保元の乱では、崇徳院の第一皇子重仁親王を養いまいらせた関係上、頼盛が上皇方につくべきところを天皇方につかせたこと、さらに平治の乱後の頼朝助命に奔走したことで知られ、「夫ノ忠盛ヲモモタヘタル者ナリケル」（愚管抄）と評される程の力を持った人であった。また延慶本によれば、清盛を世に出したのも池禅尼の力によるとする。（注五）

殿（清盛）ハ故刑部卿殿ノ嫡子ニテ渡ラセ給シカトモ十四五歳マテハ叙爵ヲタニモシ給ハス冠ヲタニモ給ラセ給ハテ、継母ノ池ノ尼公ノアハレミテ藤中納言家成卿ノ許ヘ時々申ヨリ給シ時ハ、アハ六波羅ノフカスミノ高平太ノ通ルハトコソ京童部ハ指ヲ指シテ申シカ……（第一末・十一西光法師搦取事）

この池禅尼の生んだ子が家盛、頼盛であるが、家盛は夭逝しており、頼盛が池禅尼の、正室のただ一人の子として一家の愛情と関心を一身に受けていたことは相像に難くない。つまり延慶本の先の記事には清盛、さらに清盛の正妻時子の子、宗盛へと続く平氏宗家と忠盛の正妻の子としての頼盛家の一門内部における確執を見ることができるのである。

延慶本はさらに「平家嫡々相伝」の宝刀抜丸を頼盛に与えたのも池禅尼の力とするのである。

頼盛ノ母池尼御前ハ忠盛ノ最後ノ御前ニテ最後マテモクセラレタリケリ、平家嫡々相伝シテ抜丸ト云太刀アリ、秘蔵ノ太刀ナリケルヲ頼盛ニトラセハヤト北方頻ニ被申ケレハ、大納言此太刀ヲ相伝セラレケルヲ、太政入道モ心得ス被思ケリ

とあり、「平家嫡々相伝」の宝刀抜丸が池尼御前の力により頼盛に与えられ、それを清盛が不満に思っていたとする。この太刀をめぐっての清盛・頼盛との不和は広系諸本の長門本・源平盛衰記にも見られる。

清盛嫡男なれば其跡を継ぐ。諸国諸庄園を譲るのみに非ず、家の中の重宝同じく相伝して、他家に移す事なし。中にも唐皮と云ふ鎧、小烏と云ふ太刀、清盛に授けらる。又抜丸も此家に止まるべかりけるを、頼盛当腹の嫡子にて之を伝ふ、その事に依て兄弟中悪しかりけるとぞ聞えし、（盛衰記巻第一、忠盛卒する事、長門本巻第一）

また盛衰記巻第四十「唐皮小烏抜丸の事」にも、入水に先立って維盛が舎人武里に向かい、遺言を託すところで

斯る目出たき剣なれば、嫡々に伝はるべかりけるを、頼盛当腹にて相伝ありければ、清盛、頼盛、兄弟なれ共暫しは中悪しく御座しけりと聞えきなんと、細かに物語し給ひて

とあり、清盛、頼盛の不和を伝える。この太刀をめぐる条について高橋昌明氏は「平氏全盛期において長く続いた両家の反目から溯及した結果論とは云い切れない、重要な真実が含まれていると思う」とされ、「両家の関係があまり良好でなかったことを暗示している。」（注六）と指摘されているが私もそのように考える。つまり忠盛の死後、清盛家と頼盛家との間の一門の主導権をめぐる対立がこの抜丸相伝における清盛と頼盛の対立に仮託され表出されたものであると思うのである。

さらに延慶本は抜丸の命名由来説話を載せる。

彼太刀ハ忠盛ノ父正盛朝臣夏ノ事ニテ有ケルニ、此太刀ヲ枕ニタテヽヒルネヲシタリケルニ、余所ニテ人ノミケレハ、小キト

カケノ尾ノ青カリケルカサラ〳〵ト匍テ正盛ノネタリケル方ヘ向テ匍ケルホトニ、枕ニ立タル太刀人モヌカヌニナカラハカリサラト抜タリケルヲミテ、此毒虫恐タル気色ニテ、ヤカテ帰リケリ、サテ不思議ノ思ヲナシテ正盛カネタリケルヲヲコシテ、シカ〳〵ト云ケレハ、誠太刀ナカラハカリ抜カヽリタリケリ不思議ナリケル事也、其ヨリシテソ此太刀ヲハ抜丸ト名付テ秘蔵セラレケル

この抜丸の命名説話は他に「平治物語」及び「源平盛衰記」にも見える。今、「平治物語」古活字本をあげる。

此の太刀を抜丸といふゆへは、故刑部卿忠盛、池殿にひるねしておはしけるに、池より大虵あがりて、忠盛をのまんとす。此の太刀まくらのうへに立たりけるが、みづからするりとぬけて、虵にかゝりければ、虵おそれて池にしづむ。太刀もさやにかへりしかば、虵又出てのまんとす。太刀又ぬけて大地を追うて、池の汀に立てんげり。忠盛是をみ給ひてこそ、抜丸とはつけられけれ。当腹の愛子によ(つ)て、頼盛是を相伝し給ふ故に清盛と不快なりけるとぞきこえし。伯耆国大原の真守が作と云々。

（古活字本「待賢門軍の事」杉原本も同じ。但し、金刀比羅神社本・半井本・元和本・京師本は傍線部分のみ欠）

延慶本及び平治物語の説話をみるに、抜丸命名由来説話が存在し、それが清盛、頼盛の対立へと結びつけられ語られていったあとを見ることができる。またこの説話が伊勢平氏興隆のもととなった正盛の説話として、頼盛一族が伝えていったのではないかとも思われる。盛衰記にはこの太刀についての別の伝承を載せるが、そこでは

〈平家に抜丸と言う剣があり、池大納言頼盛卿のもとにあるとし、この太刀は伊勢の国鈴鹿山の辺りに住む貧しい男が、太神宮に祈請して得たものであり、もとの名は木枯と言った。其の比、伊勢守であった忠盛がこの宝刀のことを伝え聞き、年貢三千石で買い取った〉とし、次に先の平治物語の説話を載せ、〈木枯を抜丸に改めた〉（巻四十　唐皮小烏抜丸の事）という伝承を収める。そこではこの宝剣が「伊勢の国」で発見され、「伊勢守忠盛」が買いとったとあるように「伊勢の国」を発生源とする。延慶本のみこの説話を「忠盛の父正盛」のこととし、盛衰記、平治物語が「故刑部卿忠盛、池殿にひるねして」とあるが、盛衰記、平治物語伝承は、先にみた延慶本の伝承―池の尼御前が頼盛に宝刀を相伝するように忠盛に頼んだこと――を受けてのものではないかと思う。また盛衰記、平治物語の「大蛇」にしても、八俣大蛇伝説や、源家の宝刀鬼丸・蜘切説話の例を踏襲しているように思われ、本来は伊勢平氏興隆のもととなった正盛の説話と考える。またこれに関連して、延慶本では平家正統でありながら頼盛と同じく一門から疑惑の目でみられ、平家嫡々相伝の重宝、唐皮、小烏を相伝した維盛が正盛を祖としてとらえられているのも興味深い。

○彼惟盛ハ貞盛ヨリ九代、正盛ヨリハ五代、入道相国ノ嫡孫、小松内大臣重盛ノ嫡男也平家嫡々ノ正統也、今凶徒乱ヲナスニヨリテ大将軍ノ撰ニ当ルユヽシカリシ事也（第　二末・廿　畠山兵衛佐殿へ参事）

○若君八十姫君ハ八ニソ成給ニケル、我ヲハ貞能カ五代ト付タリシカハ是ヲハ六代ト云ムトテ若君ヲハ六代御前トソ申ケル（第

三末・廿一　惟盛北方事）

維盛のこのとらえ方は正盛をもって平氏興隆の祖としており、抜丸命名由来説話も「正盛」とすることで平氏嫡流が相伝すべき宝刀としての意義を持つものであろう。頼盛離反の一因には平家一門内部の主導権をめぐる争いがあった。それがこの抜丸相伝に仮託され、語りつがれていったものと考える。

さらに延慶本はこの太刀を宗盛が所望したが、頼盛は平治の合戦の時、悪源太義平の郎従鎌田兵衛正清の熊手にかけられて討死にするところを抜丸によって助かったことをあげ宗盛の申し出を断ったことを記す。

其上大臣殿ハ嫡々ノ跡ヲ継テ此外ノ当家相伝ノ物具ト云、財宝ト云、其数多ク伝テ持給ヘリ、頼盛ハ庶子ナルニヨテ余ノ重宝等一モ相伝セスシテ僅ニ此ノ大刀一ハカリナリト宣テ、再三所望有ケレトモ、遂ニ奉ラスシテ持給タリケレハ、内々叔父甥ノ中心ヨカラストゾ聞ヘシ

先に抜丸相伝をめぐり清盛、頼盛が「兄弟中悪しかりけるとぞ聞へし」（長門本・盛衰記）と言われた対立は、同じく抜丸相伝をめぐって頼盛、宗盛の対立へと及んでいく。

四

次に抜丸相伝にみられる頼盛、宗盛の対立についてみる。平氏一門の都落ち前夜の頼盛の行動を「愚管抄」では次のように述べている。

カヽリケル程ニ七月廿四日（日）ノ夜、事火急ニナリテ、六ハラヘ行幸ナシテ、一家ノ者ドモアツマリテ、山シナガタメニ大納言頼盛ヲヤリケレバ再三辞シケリ。

義仲軍の都入りを阻止すべく頼盛に山科方面への出兵を求めたが、頼盛は先に見た清盛への宣言を楯に一度は断るが、宗盛の説得により山科へ向かうことになる。事火急に至っても清盛への宣言を楯に出兵を拒む頼盛の心は、一門から完全に離れていたとみなければならない。そしてその心境を「ナマジイニ山シナヘムカイテケリ」と記すのである。さらに続けて「愚管抄」は一門都落ちにおける宗盛、頼盛の動きを記す。

ソノ中ニ頼盛ガ山シナニアルニモツゲザリケリ。カクト聞テ先子ノ兵衛佐為盛ヲ使ニシテ鳥羽ニヲヒツキテ、「イカニ」と云ケレバ、返事ヲダニモエセズ、心モウモテミユケレバ、ハセカヘリテソノ由云ケレバ、ヤガテ追様ニ落ケレバ、心ノ内ハトマラント思ヒケリ。

つまり、宗盛が一門都落ちを頼盛に告げなかったとするのである。延慶本も頼盛は子息仲盛、光盛を引き具して、鳥羽の南赤井川原まで都落ちをし、そこから都へ戻っている。また「吉記」によれば、

又入夜按察大納言頼盛、下向、今夜各宿山科辺云々（寿永二年七月二十二日）

とあり、さらに「愚管抄」は先の記事に続けて、新三位中将資盛が鳥羽から都へ戻り、法皇に拝謁を求めたが取り次ぐ者がなく再び都落ちをしたことを記すが、「吉記」にも寿永二年七月二十五日の条に、資盛と肥後守貞能が八百余騎を率いて山崎の辺りより引き返し蓮華

王院へ入ったとすることが見え、「愚管抄」の「ソノ中ニ頼盛ガ山シナニアルニモツゲザルケリ」を一概に否定することができないのである。また延慶本が頼盛の離反について述べる条でも、「行幸ニハヲクレヌ」とする記述も「愚管抄」を参照することによりその原因も理解できるのである。これらのことを考え合せれば延慶本の「内々叔父甥ノ中心ヨカラストソ聞エシ」という一文も風聞とのみ受け流すことのできない真実が含まれているように思われる。

またこれより以前、養和元年四月一日には頼盛が比叡山の僧綱と共謀して宗盛を夜討ちにしようとしているとの落書があった。

伝聞、去比前幕下許有二落書一其趣、法皇欲レ幸日吉一者、与二山僧一同意、為レ登二叡山一也、僧綱一両幷頼盛卿等与二此事一、即御幸之隙、可レ入二夜伐於前幕下之許一之由、成二謀議一之旨、具載二件落書一、因レ茲、彼家中用心殊太云々（玉葉）

宗盛が平氏一門の主導権をいつ手にしたのかははっきりしないが、ただ同じく玉葉治承四年十二月十六日の条に

伝聞、禅門委二天下事於前幕下一了云々

とあるように、この期には宗盛に政治面の全権を委ねたことは確かである。そして翌年の閏二月四日に清盛が薨じており、その二ヶ月後にこの落書があったのである。この記事は落書にしても、宗盛側が「用心殊太云々」となる程緊迫した状態がうかがえ、清盛の死後、二人の間が極めて険悪な状態にあったことを示すものであろう。また多賀氏が吉記寿永二年二月二十一日の条に、頼盛の女が宗盛の息清盛に嫁していることに注目され、「少しく奇異に思われるのは」としながらも「或は、宗盛のを頼盛との接近乃至は和解触和策であり、非常時に際して、族の団結を要請した、宗盛の希望と頼盛のそれへの妥協一意味するものであろうか(注七)」と言われたのももっともなことと思われる。

「内大臣ノ為ニハ叔父ニテ世ニモ重クスヘキ人ナリケリ、又落留ルヘキ人ニモオハセサリケレトモ」と言われ、「無二左右一池殿ヲ焼ツルコソクヤシケレ」と後悔する頼盛と、頼盛の変心を知り「サホトノ奴原ハアリトテモナニカハセム、トカク云ニ不レ及」(延慶本)と放言する宗盛との対立は、忠盛の正妻の子としての頼盛と清盛の正妻の子としての宗盛の出目よりくる宿命的なものであったのかもしれない。

頼盛は平忠盛の正妻藤原宗子の次男として長承二年（一一三三）に生まれ、父忠盛の死の仁平三年には二十一才で正五位下常陸介になっている。その後、安芸守、参河守、尾張守を歴任し、仁安元年三十四才で従三位・非参議に進んでいる。この任官の速さは清盛には及ぶべくもないが、他の兄弟、経盛、教盛に比べても速いのである。一方宗盛は清盛の正妻平時子の子として久安三年（一一四七）に生まれ、保元二年十一才ですでに従五位下となり、十八才で正五位下美作守となっている。頼盛が二十一才で同じく正五位下に至ったことを考えれば、宗盛の昇進は極めて速い。さらにその後、仁安二年二十一才で従三位へと進み、治承三年権大納言正二位に至り頼盛を追越すのである。このことは安田元久氏が「平清盛の生存中は彼と彼の子息たちが惣領家を形成した。清盛を中心に、長子の重盛をはじめ、基盛、宗盛、重衡など、すでに成人した子息たちである。清盛の父の忠盛が一家の惣領として活躍した時代でいえば、忠

盛と、その子の清盛経盛、教盛、頼盛などの兄弟であった。ところが、清盛が嫡流をつとだときから、経盛以下の弟たちは、惣領家からはずれる。同様なことは清盛の死後にも見られるのであって、重盛、基盛が父に先立って死去したため、嫡流は宗盛につがれた。そのために重盛、基盛の子息たちはもちろんのこと、知盛、重衡など宗盛の弟たちも惣領家構成員ではなくなるのである(注八)」と説明されるように、清盛が嫡流を継いだ時点より、清盛頼盛の対立の芽が内包され、それは宗盛、頼盛の対立へと進んでいったのであろう。

頼盛が平氏一門都落ちに際し、頼朝を頼り平氏滅亡後も頼盛の一族のみ命脈を保ったことは平家物語諸本、吾妻鏡等の記すところであるが、語りもの系諸本は頼盛の離反を頼朝との関係のみでとらえているのに対し、延慶本のみはそれに加え、平氏一門内部――清盛と頼盛さらに宗盛と頼盛の対立――をとらえ、それをもって離反の一因とするのである。またそのことを象徴するものが抜丸説話であると言えよう。

五

さて頼盛が一門を離反した時、同じように一門から猜疑の目で見られていた人が、小松家の公達、とりわけ平維盛である。この項では先に述べた頼盛、宗盛の対立が維盛にどのような影を落しているのかを、延慶本を中心に述べてみたい。

維盛は父重盛の嫡男として生まれ、平氏一門の嫡流を継ぐべき立場にあった。しかし、重盛が、鹿ケ谷事件の首謀者であり院の近臣として平氏一門には最も危険人物であった藤原成親の娘を妻に迎えていたこと、さらに維盛の妻も成親の娘であること、そして頼盛の母が頼朝助命にあたったように父重盛の口添えによって頼朝が助命されたことが重盛の死後、小松家を一門から孤立させてゆくことになる。そして平家物語では一門都落ちに前後して、維盛は完全に恩愛の世界に生き、苦悩する人としてとらえられてゆく。

延慶本第三末・卅五「惟盛興妻子余波惜事」では源義仲軍が都へ迫り、法皇の逐電、さらに平氏一門都落ちという緊迫した状況の中で、都に妻子を留め置くことを決意した維盛が、妻子との訣別に苦悩する姿が描かれている。そこでは

程モフレハ大臣殿サラヌタニ惟盛ヲハニ心アル者ト宣ナルニ、今マテ打出ネハイトヽサコソ思フラメトテナク〳〵出給ヘハ

と、宗盛の疑惑を恐れつつも、別離の情に揺れる姿が見られる。但し、この記事は語りもの系諸本には見えず、広本系諸本及び略本系の四部本、南部本のみのものである。延慶本のこの記事には、維盛が都落ち以前から宗盛の疑惑「二心アル者」をはっきり意識し、維盛の遅参がその疑惑をさらに深める結果となることを恐れる姿がとらえられている。さらに延慶本は宗盛も維盛を疑惑の目で見ていたことを記し、すでに都落ち以前より両者の間に溝ができていたことを指摘している。

頼盛が一門を離反した時、次に宗盛の悩裏に浮んだのは小松家の公達のことであった。延慶本・盛衰記はそのことを次のように記す。

○サルホトニ大臣殿盛次ヲ召テ、権亮三位中将殿ハ何ニト問給ケ

レハ、小松殿ノ公達モ未タ一所モミヘサセ給ワスト申ケレハ、サコソ有ムスラメトテ、ヨニ心細ケニオホシテ、御涙ノ落ケルヲヲシノコヒ給ヲ人々見給テ鎧ノ袖ヲソヌラサレケル、新中納言宣ケルハ、是日来皆思儲タリシ事也、今更驚クヘキニアラス、都ヲ出テ未タ一日ヲタニモスキヌニ、人ノ心モ皆替リヌ…（延慶本第三末・廿六頼盛道ヨリ返給事）

○盛嗣、小松殿の公達一所も見えさせ給はずと申しけるに、大臣殿は、池大納言の様に頼朝に心を通はすやらんと覚ゆれば、さこそは有るらめとて、世に心細げに宣ひて、涙のこぼれけるを押拭ひ給ひければ、人々も甲の袖をぬらしけり、新中納言知盛此有様を見給ひて、皆是れ日比思ひまうけし事なり、今更驚くべきに非ず、さはあれども都を出で、未だ一日をだにも経ぬに人の心も替り畢てぬ…（盛衰記巻三十一）

とあり、この時点で小松殿の公達が裏切る可能性をもってみられていたのであり、それは「サコソ有ムスラメ」「日頃思儲タリシ事」と、予想されたことであった。また盛衰記には、宗盛の小松家に対する疑惑が、頼盛と同じく頼朝との関係でとらえられている点も興味深い。語りもの系諸本は先の引用文の傍線部分を欠き、小松殿の公達の動向を心配する宗盛に対し、知盛が都の内で決戦すべきであったことを後悔する由がみえるが、延慶本に見られるような宗盛、維盛の関係は見られない。この点については鈴木則郎氏が「大系本などの場合は、せいぜい維盛が妻子を都に留めてただ一人都落ちしようと決意したところに、維盛の平氏一門に背馳する姿勢が汲みとられる程度にすぎない。それも小松家の特殊なあり方を勘案するとき、維盛の本心、あるいは行動の裏側が透けてみえてくるというのにすぎないのである」（注九）と言われている。維盛を描く面において広本系諸本と語りもの系諸本との大きな違いは、広本系が、宗盛の維盛に対する疑惑が都落ち以前からのものであるとするのに対して、語りもの系諸本では、都に留めた妻子を慕い苦悩する姿が人々の疑惑を呼び、離反する可能性をもつ人物としてとらえられている点である。

さらに延慶本第五本・十七「平家福原ニテ行仏事事付除目行事」では、都への回帰を目前にし、他の一門の人々が喜び合う中で、ひとり維盛のみ故郷に留め置いた妻子を恋しく思い、その思いを余三兵衛、石童丸に語る。

サルマヽニハ余三衛石童丸ナムトヲ常ニアト枕ニ置キ給テ、暁テモ晩テモ只此事ヲノミ宣テ臥沈ミ給ヘハ、三位中将ノ有様ヲ人々見給テ、池ノ大納言ノ様ニ頼朝ニ心ヲ通シテ二心有トテ大臣殿モ打トケ給ハネハ、ユメユメサハ無物ヲトテイトトアチキナクソオホシメサレケル

語りもの系にも該当部分は存するが、そこでは都に残した妻子を慕い嘆く維盛像のみ描かれ、ここにみえる宗盛の疑惑については触れていない。またここで注目すべきは、その疑惑が頼朝との関係でとらえられていることであり、それは後に語りもの系でも指摘するが、語りもの系は維盛への疑惑を宗盛・二位殿という視点で述べるのに対し、延慶本はそれを宗盛、頼盛の対比でとらえていることが特徴的である。次に維盛の嘆きが見られるのは、延慶本第五末・十「惟盛卿高野詣事」においてである。屋島から逃れた維盛は斎藤滝

口時頼に、都落ち以後、妻子のことのみに心を砕いていた姿が宗盛の疑念を生み、それがもとで屋島を逃れたことを語る。

旧里ニ留置シ者共ノ事ヨリ外ニ心ニ懸ル事セナク世中アシキナクテ年月ヲ経シカハ、大臣殿モ池大納言ノ様ニ存スル旨ノ有トノミ宣テ打解給ハネハ、最心モ不レ留アクカレ出テ是マテ迷来レリ

この部分については語りもの系諸本にも同様な記事が見えるが、そこでは宗盛と二位殿が維盛に疑惑を持つ形をとっている。今覚一本をあげる。

おほい殿も二位殿も「この人は池の大納言のやうにふた心あり」などとて思ひへだて給しかば、あるにかひなき我身かなと、いとゞ心もとゞまらで、あくがれいでて、これまではのがれたる也（巻十　高野巻）

さらに延慶本第五末・十九「惟盛身投給事」では、維盛の入水の様子が弟の資盛に伝えられる場面では

池大納言ノ様ニ頼朝ニ心ヲ通テ京ヘ上リ給ニケリト大臣殿モ心得給テ資盛ヲモ心ヲ置テ打解給ハサリツルニ、サテハ投身給ニケル事ノ悲シサヨ

とあり、資盛も疑惑の目で見られていたことを記す。語りもの系も同様のことを載せるがそこでは、

御弟新三位中将殿に御ふみとりいだしてまいらせたりければ、「あな心う、わがたのみたてまつる程は、人は思ひ給はざりける口惜さよ。池大納言のやうに頼朝に心をかよはして、都へこそおはしたるらめとて、大臣殿も二位殿も、我等にも心をおき給ひつるに、されば那智の奥にて身をなげてましますごさんなれ。…」（巻十　三日平氏）

とあり、さらに維盛の入水により疑惑が晴れたとするところを、同じく覚一本は、

大臣殿も二位殿も「この人は池の大納言のやうに、頼朝に心をかよはして、都へとこそおもひたれば、さはおはせざりける物を」とて、今更又なげきかなしみ給ひけり、（巻十　三日平氏）

とあり、語りもの系諸本がすべて宗盛と二位殿の目を通して維盛を、さらには頼盛をもとらえているのに対し、延慶本は宗盛の目で維盛、頼盛を見る姿勢がうかがえるのである。小松家に対する宗盛の疑惑は、語りもの系の記すように、維盛の妻子を慕う情が直接原因とは考えにくく、それは延慶本の記すように、都落ち以前に端を発するものであろう。四で指摘した「吉記」「愚管抄」における資盛の動き、また「吉記」寿永二年七月二十五日にみえる小松内府の子息帰降の噂など、小松家の公達は宗盛を中心とする一門とは異った動きをしている。また「玉葉」寿永三年二月十九日には

又維盛卿三十艘許相卒指二南海一去了云々、又聞、資盛貞能等為二豊後往人等一乍レ生被レ取了云々、此説、日来雖二風聞一、人不二信受一之処、事已実説云々

とあり、維盛の戦線離説を「事已実説」と兼実が確信をもつて述べていることなど、宗盛に疑惑を持たれる因がすでに存在していたのではなかろうか。それがこの維盛、資盛の行動となって現われているのではないか。そこには頼盛と同じく平家嫡流を継ぐ可能性を持ちながらも複雑な係累ゆえに宗盛に猜疑され疎外されてゆく維盛を

見ることができる。維盛が死に臨み、

抑唐皮ト云鎧小烏ト云フ太刀ハ当家嫡々相伝シテ我マテ既ニ八代也、其胄太刀ヲハ貞能力許ニ預置タリ、取テ三位中将ニ奉レ、若不思議ニテ世ニモ御坐ハ後ハ六代可賜

（延慶本第五末・十四惟盛出家シ給事）

と遺言するのも、あくまで平家嫡流としての誇りを保とうとしたからであろう。そして語りもの系諸本は宗盛に時子を付加することにより、平家嫡流としての宗盛と、嫡流としての地位を奪われ恩愛の世界に生きなければならなかった維盛との対立をいっそう強く印象づけようとしたのではないかと思われる。

注一　赤松俊秀著岩波古典文学大系「愚管抄」補注五―一九七。上横手雅敬著「平家物語の虚構と真実」、多賀宗隼氏　国語と国文学昭四十六年九月「平家物語と平頼盛一家」

二　平家の群像

三　日本歴史二五四号「平頼盛について」国語と国文学昭四十六年九月

四　平家物語の虚構と真実

五　角田文衛著「王朝の明暗」また覚一本等語りもの系諸本は「池の尼公」の部分はない。

六　清盛以前―平凡社選書

七　日本歴史二五四号

八　注二に同じ

九　東北大学文以部究年報二九号「平家物語における平維盛像についての一考察」